

距離感見つめ直す



100

新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、自粛が要請されていた「都道府県をまたぐ移動」が、6月19日に全国的に緩和された。全国各地の観光地に遠来の客足が増え、近くの繁

華街にもにぎわいが戻ってきた。長かった閉塞感から解放されて、ようやく人々の「日常」が戻るようとしているが、依然として第2波、3波の感染拡大に対する警戒を怠るわけにはいかない。

県西部の「小國神社」(森町)では、30日の「夏越大祓式」の準備が始まっ

た。1年のちようと半分に当たるこの日、境内にカヤで造った大きな輪が立てられ、参拝者はこの輪をくぐりながら半年の「罪」や「穢れ」をはらい除く古来の儀式である。約600人の参加が見込まれているが、正月三が日に約30万人の初詣客がある同神社にとっては驚くような数字ではない。

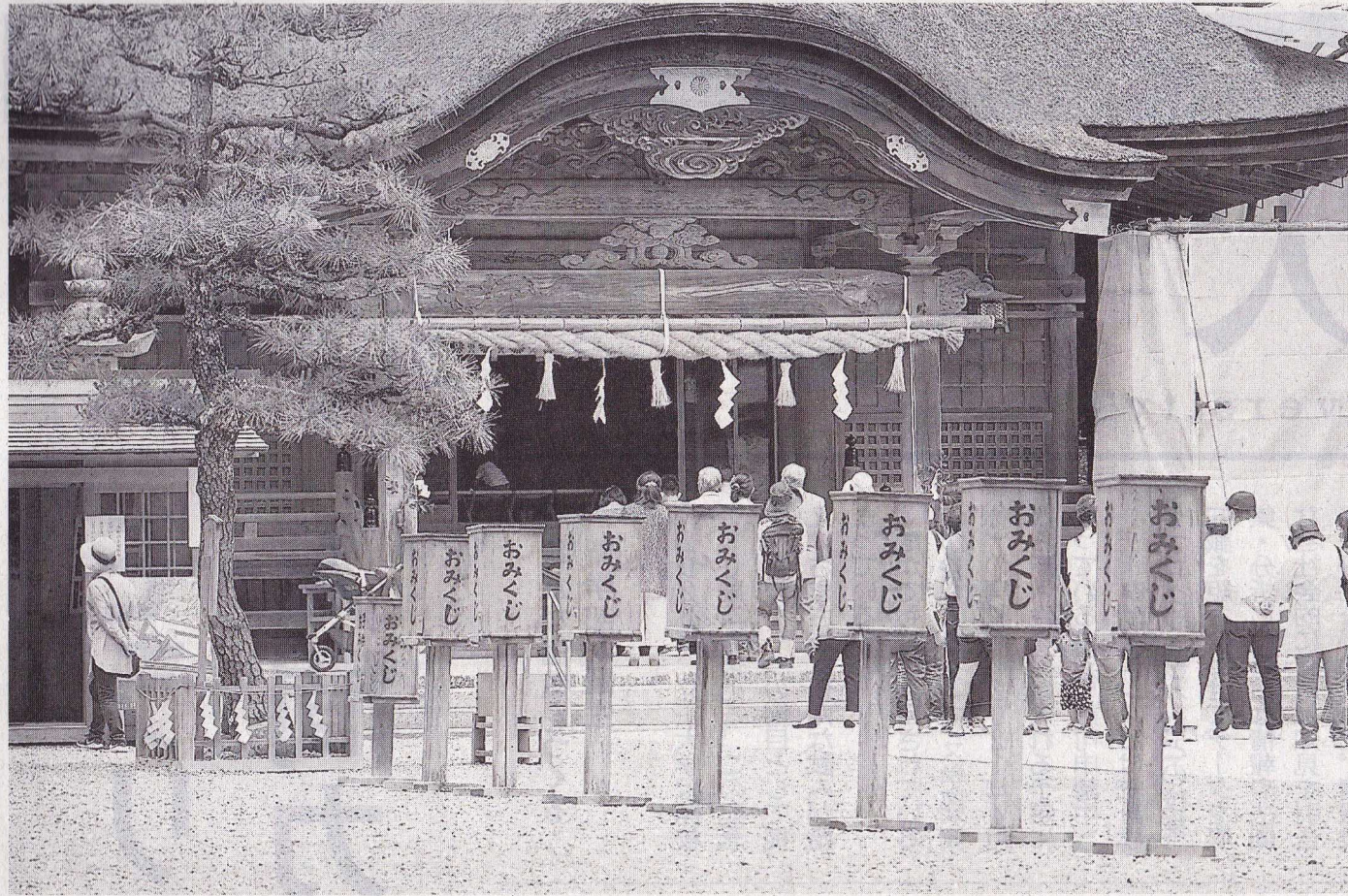
しかし、この半年間で参拝者の風景は一変した。初詣客ではまばらだったマスク姿が、今は参拝者のほとんどがマスク姿になった。今夏の大祓式には、「疫病鎮静」を願う参拝者の増加も見込まれ、マスクの着用や行列の「距離」をどう確保するのか、神社は対応に追われている。

コロナと向き合う新しい日常の中で、職場のテレワークが推奨され、野球やサッカーなどのプロスポーツを「無観客」で楽しむ習慣も広がってきた。「離れて、寄り添え」というが、今「人と人の距離」の取り方が問われている。

取材の帰りに小國神社に参拝した。さい銭を入れて鈴を鳴らそうとしたが、鈴緒は「感染防止」で外されていた。おみくじ箱も「密」にならぬよう距離を取って置かれていた。引いたおみくじは小吉。「何事もあせらず実行すれば幸せになる」とあった。

「人と人の距離」も、ゆっくり考えてみたい。

(前静岡県監査委員・富永久雄)



小國神社のおみくじ箱＝森町、全日写真・斎藤成伸さん撮影